

日本福祉大学 第26号 松本オフィス通信



- No.1 学生奮戦記
No.2 長野県地域同窓会総会・セミナー
阿南高校 大学スタディ・ツアー
No.4 犀川スキーバス事故法要
NIPPUKU NEWS

学生奮戦記

学びや活動を進める中で立ち足はかかる戸惑いや葛藤において、「ふくし」を学んでいるからこそ気づけることがあります。今回は、周囲の人のためにと奮闘する二人の学生の活動、思いをご紹介します！

生き辛さを抱えている子どもたちの支援者に・・・

災害ボランティアセンターでの活動

1年生の頃から災害ボランティアセンターに所属し、活動をしています。活動の中心は被災地支援となっていますが、入学してすぐに新型コロナウイルスの影響で活動制限がかかり、この2年間は思うような活動ができていません。コロナ禍の中、入ってきた後輩たちも想像していたような活動ができずにモチベーションが下がってしまっていたため、どうにか盛り上げられないかと自分たちが中心となって交流会を開催しました。交流会で改めて皆の思いが一つになったことで、再び意欲を持ち直すことが出来、徐々に活動参加者も増えていきました。

現在は、高校生にボランティアセンターでの活動や経験を報告し、防災・減災の意識向上につながる活動をしています。被災地支援をすることばかりが活動ではないと気づけた今、出来ることを日々模索しながら活動していこうと思います。



地元 長野市での実習

元々、子どもが好きということもあり、将来は生き辛さを抱えている子どもたちの支援者に

なることを目指しています。そのために、社会福祉士の資格取得を目指して学びを進めています。昨秋、地元の長野市にある放課後等デイサービス(障がいのある子どもたちが放課後や休日に通う施設)において実習を行いました。支援者としての子どもたちとの関わり方について悩んだ24日間でしたが、同時に新たな気づきや教えを得ることができました。

これまで、困っている子どもがいて「何とかしてあげたい」という思いが先に立ってしまい、「手伝ってほしい」というアクションがなくてもすぐに手を貸してしまっていました。「困っているのだから、手を貸すのは当たり前」と思う方が多いと思いますが、放課後等デイサービスでは社会の中で自分らしく生きていく力を身に付けるための支援が求められます。つまり、事あるごとに手を貸してしまえば、助けてもらえることが当たり前になってしまい、本来持っているはずの力を育てることができないまま、大人になってしまいます。求められる支援について頭では理解はしていますが、目の前にいる子どもに対してどのように関わるべきか瞬時に判断して動くことができず、実習



社会福祉学部 社会福祉学科子ども専修3年 竹澤 真優さん(長野日本大学高校出身)



目標を達成した実感がないまま最終日を迎えてしまいました。悔しい気持ちも残りましたが、自分自身の課題を発見することが出来たこの実習での思いを忘れずに、今後の大学での学びに活かしていきます。

残りの学生生活を充実したものに

実習を通して障がいのある子どもたちに興味を持ち、「学校における感覚過敏の子どもに対する理解と配慮」というテーマで現在、研究をしています。そして、卒業後は障害のある子どもたちに関わる職につきたいと考えています。

未だにコロナ感染症の終息が見えない中、就職活動や大学生活にどのような影響がでるかという不安もありますが、どのような状況下でも出来ることを模索し、残り一年の大学生活を充実したものにしていきたいです。

ソーシャルワーク実習 長野実習クラスのメンバーと



部活動で得た経験、仲間との協力を活かして

I部バドミントン部のキャプテンとして

「日福に憧れの先輩がいる。」「高校で納得のいく結果が残せなかった分、大学で頑張りたい!」。この2つの理由から、日本福祉大学への入学、そしてI部バドミントン部の入部を決めました。

2年時の幹部交代を機にキャプテンに就任し、今までは先輩方に頼りきりだった自分が、いきなりバドミントン部の顔でもあるキャプテンを任されるということに、大きなプレッシャーを感じましたが、同時に大好きなバドミントン部をより良いものにしていきたいという気持ちも芽生え、挑戦することになりました。

活気ある部活動にするために

そこからキャプテンとして部をまとめていくにあたって、ある課題に直面しました。

その課題とは「部員全員が同じ熱量で部活動に取り組めていなかった」という点です。なにしろ部員が男女合わせて48人の大所帯で、競技歴や入部動機などもバラバラ。



また、コロナ禍での部活動ということもあり、十分な練習時間を確保できなかったり、目標の大会が中止となってモチベーションが保てないなど、様々な要因が重なって部活動の取り組み方に大きな差が出てきてしまっていました。

この課題解決のため2つの目標を掲げて取り組みました。1つ目は月に1回ミーティングを行い、部全体の目標、個人の目標を明確にしてから練習に臨むようにする事。2つ目は自分達から部活動に集中できる雰囲気・環境を作る事です。

実践した結果、月一回のミーティングでは、定期的な目標を立てる事で、自分やチームの現状を正確に把握でき、練習や大会へ向けてのチーム全体のモチベーション維持や個人としての技術向上の原動力につながりました。2つ目の部活動での雰囲気・環境作りでは、限られた練習時間の中で、自分だけ声を出して盛り上げようとしても、精神的にも辛く限界があります。そこで、同期と協力して自分達の代から声を出していき、部を盛り上げる事を徹底しました。そうした事で、以前よりも練習に活気が生まれ、短時間でも充実した活動になっていきました。



社会福祉学部 社会福祉学科人間福祉専修3年 高嶋 健人さん(長野商業高校出身)

部活を通しての学びと成長

このアプローチをきっかけに、自分自身、周りの状況も考えて俯瞰的に行動できるようになっていきました。部員の状態、部活の雰囲気、常にアンテナを張り、チームの足りない部分を補ったり鼓舞するといった大切さ、楽しさを学びました。

また、問題に直面した時、一人で抱え込まずに解決しようとするのではなく、他の部員や先生方にも協力してもらいながら、責任を持てる範囲で仕事を分かち合う事の重要性も学びました。

コロナの影響で思い通りの部活が出来ない中、顧問の先生方のサポートや先輩方からのアドバイス、ついてきてくれた同期と後輩達のおかげでキャプテンをやり遂げる事が出来ました。関わって下さった方々全員に感謝です。将来は地元長野県に戻り、福祉に携わる仕事をしたいと考えています。学業で身に付けた知識や、部活動を通して得た経験を社会で活かせるよう、今後も精進していきたいと思っています。



令和3年度 日本福祉大学長野県地域同窓会 総会・セミナーを開催

2022年2月26日、長野県地域同窓会によるセミナーが開催され、同窓生18名、在学生12名、教職員4名の総勢34名が参加しました。例年は会場での対面開催でありましたが、コロナ感染症拡大防止の観点から昨年度に続き、今年度もオンラインでの開催となりました。

東條会長より「昨年度同様、画面を通してではありますが、このように同窓生の皆さんの笑顔に触れ、コロナ禍での緊張感や孤独感から解放されるような思いです。今回も人の温もりを感じられるそんな幸せなひと時にしましょう」とのご挨拶があり、医療、福祉分野で日々コ

ロナ感染症と向き合いながら現場で活躍されている同窓生の皆さんにとって、同窓生同士、在学生との交流は元気・励まし・刺激をもらえるひと時となったようです。

セミナーでは同窓生による実践報告の他、長野県内で実習を行った在学生によるソーシャルワーク実習報告会、また、同窓生と在学生の座談会も行われ、盛況のうちに幕を閉じました。その一部を抜粋してご紹介します！

ソーシャルワーク実習長野クラス報告会

日本福祉大学 社会福祉学部には社会福祉士の資格取得に必要なソーシャルワーク実習を故郷長野県にて行う「長野実習クラス」があります。

将来、長野県に戻り、福祉の現場で働きたいと考えている学生にとっては、長野県の福祉の現状や課題を知ることができる貴重な学びの機会となっており、毎年十数名の学生が長野県内の各施設で実習を行っています。

今回のセミナーでは、今年度、長野県内で実習を終えた学生の中から代表者3名が発表者に選ばれ、実習中に経験したことや学んだ

こと、自分自身の今後の課題などを報告しました。

高齢者のデイサービスセンターで実習した若尾さんは「実際に担当者会議や利用者の方との契約の場に立ち会わせていただき、貴重な経験をさせていただきました。特に倫理綱領、多職種連携の大切さを実感しました」、児童発達支援センターで実習した堀内さんも「施設と地域の連携や、施設が地域にどのような影響を与えているかなどについて学ぶことができました」と現場での気づきや実習先への感謝の思いが伝えられました。

同窓生×在学生が考える それぞれのふくしとは？



グループワークは、障害、高齢者、児童の3分野の分かれて実施！

同窓生と在学生の座談会（グループワーク）

東條 在学生のお二人は将来、目指していることはありますか？

倉嶋 卒業後は長野県に戻って県内の病院で医療ソーシャルワーカーになりたいと考えています。

森川 僕は社会福祉士の資格をとって、生活相談員として福祉に携わりたいと思っています。

東條 このグループにいる同窓生の皆さんは実際、長野県の障害福祉の現場で活躍されている皆さんなので、今日はぜひ「実習での悩み」や「将来のことで聞いてみたいこと」があったら聞いてください。

倉嶋 実習中に困ったことは、利用者の方にアセスメントを取る際に、直接聞くと失礼に当たるような事項を遠回しに聞くのが難しいなと感じました。これを聞くと相手側がどんな気持ちになるのかを考えると不安な部分もあったので、どのように聞いたりするのが良かったのかなと...

東條 すごく真面目で素敵な質問だと思ったんですが、「相手の気持ちを考えた時にどう聞くのが一番いいのかな」ってことですね。同窓生の皆さん、いかがですか？

青木 私自身、障がいを持つ子の母親として、何でも聞いてもらって構わないと思っていましたが、やっぱり、関係性を築くことが大事かなと。自分も現在は居場所支援の仕事をしているので、上から目線にはならないような関係性を作ることを心がけています。

勝見 私は現場のスタッフとして、直接聞くことよりも日常的な支援の方が多いので、その方の様子や表情から読み取る形の方が多いかもしれません。その方の様子から「こうなのかな？」と思ったら、直接聞くという形以外でその方の表現を見てみたいという声かけをしているかなと思います。

村松 一つは日ごろの意図的な話の中で「よく見る。聞く。捉える」ことがアセスメントそのものだと思っています。でも、実は利用者の方やご家族が僕らをアセスメントしているというか、逆アセスメントしているというのが本当のところなんだろうと思っています。それは、どういう目線でとかどういう意図でとか、どうやって捉えてくれるかということを見て感じておられると思うんですね。その姿勢とかに信頼をいただいて、話しづらいことも話してくれるようになったりすることはあるんじゃないかと思っています。

障害分野グループワーク メンバー

同窓生：東條会長、荒川さん、村松さん、青木さん、勝見さん、片桐さん

在学生：倉嶋さん、森川さん（いずれも社会福祉学部3年）以下、敬称略
※アセスメント・・・必要な支援計画を立てるために対象者を客観的に調査・評価すること

東條 同窓生の皆さん、ありがとうございます。「重い障害を抱えた方たちは言葉だけではなく、行動やご様子でも表現されているから、それを知ろうとする姿勢が大事なんだよ」という先輩たちからのメッセージをいただきました。森川さんは何か実習中に困ったこと、聞いてみたいことはありますか？

森川 実習で知的障害者の方や強度行動障害の方の支援計画を立てる際、言葉だけのアセスメントでは「本当にこれが利用者さん本人が必要としていることなのか」と考えてしまい、支援計画の難しさを感じました。

村松 特に行動障害のある方は行動で自分のお気持ちを表現されます。自分の思いが伝わらない苦しさや相手の言っていることが分からないという苦しさなどがあって不安に駆られてしまうことがあるのかなと思います。そこをしっかりと理解して、職員が直接関わって感じたり、捉えたりすることを丁寧に積み上げていくことが必要かなと思います。利用者さんの思いを「想像すること、共感すること、代弁すること」を何度も繰り返して回数を重ねることが本当の支援に繋がるのだと思いますね。

荒川 私も勤務先の精神科での関わりの中で、毎日会っている入院患者さんでも一年かけてやっと挨拶してくれたとか、一年かけて椅子に座ってくれたというケースも。こちらの都合ではなく、患者さんや当事者の方のペースに合わせる必要があるなと感じています。

片桐 人と関わる時に、私がいつも大切にしていることなんですが、「その方の生まれてきた環境とか育てられた環境で、自分が育ったとしたら」と想像しながら関わることによって、気持ちが理解できたりするので、そういったことが必要かなと感じています。

森川 大変参考になりました。たくさんのご意見をいただきありがとうございました。

倉嶋 すごく勉強になりました。ありがとうございました。

東條 私たちも学生さんの初々しいお話が聞けて、初心に返ることが出来たように思います。また、長野県に戻って来て一緒にお仕事できるといいなと思いました。またどこかでお会いしましょうね。



高齢者
児童
チーム
&
も

高齢者分野では、在学生の就職活動の話題がメインとなり、「就活の際に何を最優先にしていたか」、「公務員を目指すにあたり心がけていたことは？」などの質問が投げかけられました。先輩同窓生からは「自分の中にある思いを大切にすること、焦らない気持ちが大事。優先したいことはその時その時で考えていいと思う」、「もし、自分の想像していた職場とイメージが違っても、そこで得た経験は決して無駄にはならない。その経験を活かして違う道へ進む事も出来るから」と前向きなアドバイスをいただいていた。

児童分野では、在学生の方から「社会福祉士国家試験の模試で、点数が取れずモチベーションが下がっている」との相談を受け、「最初から満点を目指すのではなく、合格点を取ることを目標に」や「目的を試験合格にするのではなく、仕事に必要なだから勉強をするという発想に転換する」など、同窓生の方たちも乗り越えてきた国試について親身に相談にのる姿が見られました。





同窓生による実践報告会では社会福祉法人塩尻市社会福祉協議会でコミュニティソーシャルワーカーとして活躍されている同窓生の片桐さんと新井さんのお二人に発表していただきました。

片桐さんはコミュニティソーシャルワーカーとして活動してきたこれまでの2年間、「地域福祉って何だろう」と日々探りながら、行政では解決が難しい生活課題に地域の方々と共に取り組んできました。取り組みの事例としては、障害を抱えた家族を持つ方から「周囲から冷たい目で見られている、肩身の狭い思いをしている」という相談を受け、障がいの理解を深める講座を企画。講座のタイトルの「私には関係ない??～障がいを友達ごととして考える～」は当事

者の方と一緒に考えたタイトル。自分事として考えると少し重くなってしまうことを懸念し、「友達のこと」として考えてみようという企画としたそうです。片桐さん自身もこの講座運営を通して「どんな人でも、地域で平等に安心して暮らす権利がある、受け入れてもらえる居場所がなくてはならない」ということに改めて気づいたと話されました。

新井さんからは地域のコミュニティ支援についての発表がありました。新井さんが現在担当している地域においては従来の地縁コミュニティを基盤とした支援では、限界が見え始めているという課題がありました。しかし、一方で市民活動団体やNPO法人、ボランティアの活動は年々増加していることに着目

地域課題解決の主体を従来の地縁コミュニティのみと捉えずに、多様な人材が地域課題に取り組めるような仕組み作りが必要と考え、「しおじりつながるプロジェクト」を発足し、月に一度、情報交換やつながりの場として地域の方々に活用されているということです。

コメンテーターとして参加された浅原先生は新井さんの在学時代に指導にあたっていた恩師。今回のセミナーでの再会を嬉しく思うと話され、教え子たちの日々奮闘している姿に熱心に耳を傾けていました。実践報告を終えたお二人に向けられた浅原先生の暖かいコメントが片桐さんや新井さんにとっても大きな励みとなったようです。



塩尻市社会福祉協議 ふれあいセンター東部
片桐 満智香 さん
社会福祉学部2011年度卒業
塩尻志学館高校出身



塩尻市社会福祉協議 ふれあいセンター広丘
新井 佑哉 さん
社会福祉学部2017年度卒業
塩尻志学館高校出身



日本福祉大学 社会福祉学部
浅原 千里 准教授

参加者の声

同窓生
長野県地域同窓会
会長 東條 知子さん



在学生
社会福祉学部 医療専修 3年
倉嶋 文哉さん(市長長野高校出身)



今年度開催された長野県地域同窓会セミナーは、まさに『明るい未来』を実感できるひと時でした。

同窓生による実践報告では、職場での「地域づくり」という役割の中で、疑問や課題に思ったことに真摯に向き合っている姿が伝わってくる内容でした。そして、その向き合い方がとても楽しそうで、きらきらと輝いているのです。様々な住民の方々の存在があってこそ耕されていく地域社会であるという、多様性を尊重し合うメッセージでもあり勇気づけられるものでした。

在学生の長野県社会福祉実習報告とその後のグループワークでの学生たちのまっすぐな意見は、同窓生にとっては新鮮で日々の振り返りとなる内容だったと思います。

大学への貢献のあり方は多様であると思います。その中でのように学生たちと直接交流が出来る場を持つことは、長野県地域同窓会の魅力です。コーディネート役の松本オフィスの存在も大きいですね。同じ大学で「ふくし」を学んだ者が、つながり続けられる事に感謝し、また集い続けたいと感じました。

今回、地域同窓会セミナーの中で実習の報告をさせていただきました。自身の実習中の迷いや葛藤について同窓生の先輩方から貴重なアドバイスをいただき、励ましをいただけたことで、将来進みたい道への意欲が更に高まりました。

また、グループワークの中でも在学生の悩みに対してたくさんアドバイスをいただきました。学生同士、実習での悩みを話し合う機会は以前にもあったのですが、福祉の第一線で働く先輩方から様々なアドバイスを聞ける機会というのは今まで無かったので、とても勉強になりました。

今回学ばせていただいた事を、今後の就職活動や卒業後の仕事で活かしていけるように、さらに学びを深めたいと思います。ありがとうございました。

2021年大学スタディ・ツアー 長野県阿南高等学校 福祉コース 2年生

2021年12月20日(月)、専門教育の必要性を探るため、また自分自身の将来について考える機会として、福祉系の上級資格取得を考えている生徒のみなさんを対象に、大学スタディ・ツアーが開催されました。

大学生活をよりリアルにイメージできるように、事前に大学や大学生に聞きたい質問を募集し、当日は在学生や大学教職員からの声を届けながら、一日、美浜キャンパスにて模擬講義やキャンパスツアー、大学生との交流会などのプログラムを体験しました。

「仕方ない」は本当に「仕方ない」のか？

「今まで、仕方ないと我慢し、諦めてしまっていることはなかったかな。でもそれって本当に仕方ないことなのか？」社会福祉学部の野尻先生による模擬講義では、日頃から福祉の勉強をしている阿南高校の皆さんと「子どもの貧困」をテーマに、スクールソーシャルワーカーの役割にも触れながら、子どものしあわせについて考えていきました。



日本における子どもの貧困は7人に1人とされている中、不登校、非行、学習の遅れなどの行動事情には、貧困が影響していることが紹介されました。なぜそのような行動をとるのか？その背景には何があるのか？本音は何か？

今後の社会構造の変化とともに益々増加が予想されている、困難な状況の子どもやその家庭。その方々の想いを聴き、ひとりひとりと向き合いながら課題解決ができる専門職の役割や必要性が伝えられました。

最後に「もっともっと社会福祉の正義と一緒に学びましょう!」と福祉を学んでいる高校生へ、野尻先生から熱いメッセージが送られました。

「高校と大学の違いとは？」

高校生と大学生との交流会では、2つのグループに分かれて、大学での勉強のことや一人暮らし、進学を決めたきっかけなど、様々な話題が繰り広げられました。

高校と大学で大きく変化した点で、「学業への意識」と回答をしてくれた先輩が多数。「高校の授業は受身だったけど、大学では自発的に参加して、分からないことや疑問に思うことは積極的に質問するように心がけている」、「コロナ禍でオンライン授業導入により、思い描いていたキャンパスライフではないけれど、時間を有効に使って、勉強や一人暮らしを楽しむようにしている」、「実際の事例に対して絶対的な正解がないことを考える難しさはあるが、仲間と一緒に考える時間は楽しい」と、コロナ禍でも自主的に学ぼうと意識して過ごしている先輩の姿に高校生からは「かっこいいな」との本音も聞かれました。



その他、「挨拶、時間や提出物厳守など、基本的なことはしっかりできるように!」、「英語が苦手な人は勉強しておくべき」など、高校時代に取り組んでおくべきポイントを伝えてくれた先輩もいました。

最後に先輩たちから「コロナ禍でできないことを考えるよりも、できることを考えて様々なことに挑戦してほしい」とのエールが高校生に送られました。

コロナ禍で、学生のキャンパスライフを直接見てもらうことはできませんでしたが、今回の大学生との交流や大学での学びが、今後の進路選びの参考になれば嬉しく思います。

キャンパスツアー
では東京ドーム
約5.3個分の
構内を散策!





犀川スキーバス事故 三十八回忌法要が営まれました

2022年1月28日(金)犀川スキーバス事故から37年を迎え、正源寺(長野市七二会)と慰霊碑前(長野市信更町)にて三十八回忌法要が営まれました。

今年も新型コロナウイルス感染症拡大の影響を踏まえ、現地での参列者を制限して、同窓生、本学関係者が参列しました。

「創立70周年記念事業(2023~2025年)においては、学園・大学70年の歴史資料、データのアーカイブズ化をさらに強める取り組みを行っていきます。歴史は過去との対話であると言えますが、この中でスキーバス事故が起きた事実を問い返し、今後に向けた教訓を責任性の意味を含め深める作業を進めます。1月28日をいつまでも忘れてはならない日、顧みるべき原点として本学の歴史の中に深く刻み込んでいきたいと考えています。」と丸山悟理理事長より、追悼の言葉が述べられました。

学生とともに、継承を考える

今年度は学内でも学生に対する継承の取り組みに力を置き、長野県出身の学生にも、地元長野県で起きた事故の概要・教訓を伝える機会を設けてきました。

「美浜キャンパス内の友愛の丘や友愛の桜に看板を取り付けることで周知を強化してはどうか」、「現地を見てみたい」等の意見が出た中、卒業間近の4年生(長野県出身学生)が、現地慰霊碑および正源寺を訪問しました。



犀川スキーバス事故現地を訪問して・・・

2022.3.12

先日、犀川スキーバス事故の現地を訪問し、慰霊碑にて、参拝させていただきました。

今までバス事故に関する新聞記事を読んだり、大学関係者から話を聞いたりする機会を通じて、地元長野で起きた事故ということは分かっているつもりでいました。しかし、実際に現地に立ってみると、当時の事故現場の跡が一部残されていたりと、事故の悲惨さや怖さを強く実感しました。

また、事故後の救助やご遺族の方々への支援等には、地域の地域の方々や長野県地域同窓会の先輩方のご尽力があったことを知りました。改めて、この事故について、長野県出身者として心に留めおきたいと思います。

昨今の災害や紛争で亡くなられた命も、この事故で亡くなられた命も同じ命であることには変わりません。だからこそ、今ある命に感謝し、精一杯生きたいと強く感じました。そして、この犀川スキーバス事故で亡くなられた先輩方に想いを寄せ、一日一日を大切に過ごしていきたいと思いました。



子ども発達学部 心理臨床学科 心理臨床専修 4年 山崎 結夏

4年生のみなさん、ご卒業おめでとうございます

2022年3月19日(土)、学位記授与式が挙行されました。4年間、楽しいことばかりでなく、コロナ禍で悔しい思いをしたこともあったと思いますが、最後は和やかな雰囲気でもみやサークルの仲間と一緒に記念撮影する姿が見られました。

4月から新たな生活が始まります。こらからの皆さんのご活躍をお祈りいたしております。



「ふくしAWARD2021」

大学生活での経験や学んだ事を、授業だけではなく、もっとたくさんの人に伝える、学内プレゼンテーションコンテスト「ふくしAWARD」。松本オフィス通信24号でも紹介しました、認知症啓発活動およびクラウドファンディングがふくしAwardにおいて、大賞と学長特別賞を受賞しました。おめでとうございます！

今年度活躍した 学生を励ます集い

日本福祉大学ではスポーツや学術文化、地域貢献活動などで優れた成果を収めた学生やサークル・団体を表彰しています。今年度も45個人、9団体への表彰、および24サークルへ活動備品の贈呈式がありました。学生の中には長野県出身学生もあり、部活と学業を両立して励んでいる姿に頼もしさを感じました。

第19回 高校生福祉文化賞 エッセイコンテスト 入賞作品発表！

第19回を迎えた「高校生福祉文化賞エッセイコンテスト36℃の言葉」。応募総数8,028点の応募作品の中から、個人賞18名、学校賞16校が選ばれました。さまざまな想いが込められた作品から高校生が日常生活の中で何を思い、何を感じているのかをぜひご覧ください。現在は世界情勢においても不安な状況が続いています。本学も建学の精神に基づき、一日も早い平和的解決を望んでいます。高校生の皆さんも昨今のさまざまな問題から改めて「ふつうのくらしのしあわせ」を日々感じているのではないのでしょうか。次回は、ぜひみなさんの心の中にある36℃の言葉を教えてください。第20回の募集については4月以降に公開予定です。



2023年度入試に向けて始動！

日本福祉大学の歩き方

「大学を知る」、「キャンパスライフを知る」、「日福生を知る」、「一人暮らしを知る」、「日福のスゴイを知る」をキーワードに日本福祉大学の学びや大学生のキャンパスライフを紹介しています。情報は随時更新されていきますので、時間のある時にチェックしてみてください。

また、2022年度オープンキャンパスの日程もこのページからも確認できます。各キャンパス、オンライン・対面での実施を予定しています。日時や詳細に関しては、HPをご確認ください。



受験生サイトもチェック

日本福祉大学のことをもっと知りたい!と思ったら、まずは本学HPの「受験生サイト」をチェック!大学・学部のことが一目でわかる「WEBオープンキャンパス」をはじめ、入試にまつわる様々な情報が入手できます。



県内進学相談会情報

2022年度も長野県内(飯田市、伊那市、松本市、長野市)で開催予定の進学相談会に本学も参加します。お近くの方はお立ち寄りください。皆さんにお逢いできることを楽しみにしています。



過去問題、配布中!

過去の入試データや最新の入試情報は、入試ガイドをチェック!過去問題を探り、出題傾向を知ること合格を勝ち取りましょう!過去問題が必要な方は、右記サイトよりお申し込みください。



松本オフィスも応援!

「大学や学部の詳しい説明が聞きたい!」、「自分はどうな入試が向いているのかな…」など、お困りではないですか?そんな時にはお気軽に松本オフィスまでご連絡ください。出願に必要な事前面談にも応じます。



日本福祉大学 松本オフィス

〒390-0815 長野県松本市深志1-1-24・3F

TEL: 0263-31-9011 FAX: 0263-32-8018

開館時間: 9:30~17:30(日・月・祝は休館)

MAIL: e-matsumoto@ml.n-fukushi.ac.jp



松本オフィスへご質問・ご相談はこちらのフォームから➡

